

機関番号：16301  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20730417  
 研究課題名（和文）「母性愛」信奉傾向が養育態度に与える影響の解明—量的・質的な検討の併用—  
 研究課題名（英文）Effects of mothers' adherence to "maternal love" on parenting: Both quantitative and qualitative methods.  
 研究代表者  
 江上 園子（EGAMI SONOKO）  
 愛媛大学・教育学部・准教授  
 研究者番号：10451452

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、母親が「母性愛」という社会通念を信じ込む傾向すなわち「母性愛」信奉傾向が、現実の養育場面においてどのように作用するのか、検証することであった。そのため、質問紙調査によってさまざまな要因との交互作用を中心に量的な検討を行いつつ、面接調査によって個人の語りを対象に質的な検討を行った。その結果、母親の養育態度に影響を与えるのは母親自身の「母性愛」信奉傾向だけではなく、パートナーである父親の「母性愛」信奉傾向や夫婦関係における満足度も重要であるということがわかった。さらに、以前すでに出産を経験している母親よりも調査時に初産である母親の方が、「母性愛」信奉傾向に関する語りにおける出産前後の変化が多くみられることも示唆された。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to investigate the effects of mothers' adherence to "maternal love" on their parenting. The methods for the entire study were as follows: a questionnaire including various factors of parenting defined quantitatively, and an interview designed individually to analyze each mother's narrative. Main findings were that it is not only mothers' adherence to "maternal love" which affected their parenting styles but also their partners' adherence to it as well as their marital relationship. Moreover, when compared the changes in their narratives during pregnancy and after the child birth, the changes were greater for the mothers who were pregnant for the first time than the mothers who already had had more than one child.

## 交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2008年度 | 800,000   | 240,000 | 1,040,000 |
| 2009年度 | 600,000   | 180,000 | 780,000   |
| 2010年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 1,900,000 | 570,000 | 2,470,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：「母性愛」信奉傾向・養育態度

## 1. 研究開始当初の背景

わが国で、「育児ストレス」や「虐待」が社会問題として語られることになって久し

い。そして育児ストレスに悩んだり子どもに虐待をしてしまったりする存在として、もっとも多いのは母親である。その背景として、

核家族化や少子化をはじめとする社会の変容が挙げられつつも、加害者である母親たちを非難する声もある。海外でも、それが、“mother-blaming”という形で問題視されている(例えばCaplan, & Hall-McCorquodale, 1985)。しかし、大日向(2000)やSwigart(1995)は、「母親ならば上手に子育てができて当たり前である」という「母性神話」に代表されるわれわれの社会文化的通念こそが、母親たちを加害者にして追いつめることで、結果、母親たちは逆説的にも子どもを虐待してしまうのではないかと説いている。

ところが、これは臨牀的なエピソードや社会学的な実態調査の中では取り沙汰されているものの、仮説の域を出ていない。そこで江上(2005)は、『母性愛』信奉傾向を「社会文化的通念として存在する伝統的性役割観に基づいた母親役割を信じそれに従って育児を実践する傾向」と定義し、これが養育態度に与える影響の実証を試みた。その結果、母親をとりまくほかの要因の如何によって、養育場面において「両刃の剣」のような意味を持つことは実証されたが、Belsky(1984)が唱える、養育態度に作用する社会文脈的要因の中でももっとも重要な位置を占めているパートナーとの関係性と「母性愛」信奉傾向との関連および養育態度への影響過程は明らかになっていない。さらに、「母性愛」信奉傾向が、時間軸も入れたさまざまな要因と絡み合いながらどのように子どもとの関係に影響するのかということも審らかにしていくためにも、母親ひとりひとりの声に丁寧に耳を傾ける質的なデータも必要である。

したがって本研究では、「母性愛」信奉傾向が養育態度へと与える影響を、家族間の影響や時間軸も含めて明らかにすることを目的とした。最終的に、本研究によって得た知見を、母子衛生における予防的な知見や提言へとつなげることにより、「育児ストレス」や「虐待」などの社会問題に対する何らかの貢献が可能であると言える。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、母親の「母性愛」という社会通念を信じ込む傾向すなわち「母性愛」信奉傾向が、現実の養育場面においてどのように作用するのか検証することである。そのために、アンケートによる大規模な調査で子育て中の母親における全体的な傾向を明らかにすることと同時に、インタビューによる詳細な検討で母親個人の特徴や様相を審らかにすることを計画していた。

このように、「母性愛」信奉傾向が養育態

度へと与える影響について量的・質的に両方の側面から明らかにするために、これまでの先行研究(江上, 2005, 2007, 2008)でそれぞれ行ってきた方法をさらに洗練させつつ、新たな試みも盛り込んだ調査を計画した。実際に、質問紙調査では、母親自身の「母性愛」信奉傾向だけではなく、父親の「母性愛」信奉傾向も問題とすることで、夫婦間の「母性愛」信奉傾向のバランスによって母親の養育態度も左右されるのではないかという仮説を検証することを目的とした。また、面接調査では現在育児期ではない妊婦も対象とし、出産前後の変化を問うこととした。これによって、「母性愛」信奉傾向が母親の子育てにどのように作用していくのか、そのプロセスを丁寧に描き出すことを目的とした。

## 3. 研究の方法

質問紙調査では、現在乳幼児を子育て中の母親および父親を対象とした。協力は、全国の幼稚園もしくは保育園に依頼した。「母性愛」信奉傾向が養育に及ぼす影響に関しては、先行研究(江上, 2005, 2007)では母親のみの分析であったが、予備調査で父親の「母性愛」信奉傾向が母親の養育態度に与える影響が示唆されたことから、夫婦をペアデータとして扱い、両者の「母性愛」信奉傾向が子どもへの養育に対して、交互作用効果も含め、それぞれどのように影響しているかについて検討した。協力者は、父親と母親がそろったペアデータが304組、母のみのデータが512名であった。質問紙の内容は、「母性愛」信奉傾向尺度、夫婦関係満足度尺度、養育態度尺度などから構成されている。常勤職の母親ならびに父親のデータの不足が想定されることから、質問紙の容量については盛り込みすぎないように、十分配慮した。

面接調査では、縦断的な検討を想定していたことや、調査の設定上、協力者の個人的な話を聴く場面になることなどから、協力者の確保と維持に工夫した。協力者は、直接の友人知人はなるべく避け、人づてに個々に募っていった。面接は、協力者の自宅あるいは協力者が希望する場所(喫茶店やレストラン、大学の研究室など)で行った。すべての協力者について、1回目の面接ではラポールを取ることに十分時間を割き、「子育ての先輩に話を聞かせてもらう」という姿勢で協力者が話をしやすい雰囲気を作り、信頼を得るように努めた。また、協力者が妊婦から乳児の母親であることから、その協力者ごとに無理のないよう常に配慮し、質問の数や順番などを考慮しながら調査を進めた。調査内容は、プロフィールとしての家族構成や就業形態、「母性愛」信奉についてのとらえ方、夫との関係や子どもについての感情など、先行研究

(江上, 2009) を参考に用意した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 平成 20 年度

質問紙調査で用いる項目の検討のため、アンケートによる予備調査を行った。この予備調査では、母親だけではなく父親もペアとしてデータ収集することで、夫婦関係や父親と母親の「母性愛」信奉にかかわる考え方の違いが母親の養育態度にどのように影響しているか、検討する必要性が見出され、本調査で使用する尺度も決定することができた。面接調査については妊娠期から出産後までにわたる縦断的な研究となるため、インフォームドコンセントを得るために他の研究者との打ち合わせや話し合いなどからノウハウを学び、協力者の確保に努めた。その結果、年度中に 10 名分のデータがそろった。これらのインタビュー調査によるデータも、文字としておこし事例検討を行った結果、初産婦と経産婦との違いから分析する観点を得た。

##### (2) 平成 21 年度

前年度に得た予備調査データの分析を行った。その結果、父親の「母性愛」信奉傾向が母親のそれよりも高ければ高いほど、母親は子どもに受容的な養育態度を持っていないということがわかった。また、父親の「母性愛」信奉傾向と母親のそれとの差異得点が母親の受容的な養育態度に与える影響は、夫婦関係満足度によって緩和されるということも明らかになった。これらの結果より、母親の養育態度は母親自身の「母性愛」信奉傾向のみならず父親のものからも影響を受けているということが証明された。そして父親の「母性愛」信奉傾向が高く母親のものが低い場合母親はストレスやプレッシャーを感じているが、そのような状態でも母親が夫婦関係に満足していればその影響が緩和される可能性があるということが示された。さらに母親のデータのみを取り出し、「母性愛」信奉傾向の高低と夫婦関係が養育態度にどのように作用しているかという観点から詳細に検討した結果、母親の就業形態によって、「母性愛」信奉傾向と夫婦関係満足度が養育態度に与える影響のメカニズムが異なることが示唆された。

##### (3) 平成 22 年度

引き続き質問紙調査ならびに面接調査の分析・検討を行い、一定の結論を得た。第一に、母親の「母性愛」信奉傾向はパートナーである父親の「母性愛」信奉傾向との相互作用により、母親が認知する夫婦関係満足度ならびに母親の養育態度（応答性と統制）に影響を与えるということがわかった。具体的には、父親の「母性愛」信奉傾向が高く、母親

の「母性愛」信奉傾向が低い場合、母親の夫婦関係満足度が低く、応答性も低かった。一方で、父親の認知する夫婦関係満足度ならびに母親の養育態度（応答性と統制）には交互作用効果は見られなかった。本研究により、母親における自身の「母性愛」信奉の影響のみならず、父親の「母性愛」信奉傾向の影響も明らかにされた。なお、この結果は面接調査における事例検討とも一致する。パートナーである父親の養育信念が、夫婦関係ならびに母親の育児においても継続的に影響を与えており、それはとくに初産の母親の場合に顕著である可能性が示唆された。また、はじめての子育てでもたらされるネガティブな感情がある特定の場合には適応的な意味を持つということも「母性愛」信奉傾向との関連から見出された。「母性愛」を肯定しつつも実際にはそのように行動できない母親の場合、そのような自分自身を振り返る際や子どもとのかかわりでネガティブな感情を抱いているが、それを通して自分の育児を振り返ったり子どもの立場に立ったりなど、母親としての自分を捉え直す姿勢がみられる。同時に、「母性愛」信奉を否定しながらもそれに適わない生活をしている母親の場合、子育てに夫の協力が得られない、もしくは育児だけの生活で閉塞感を感じているが、それにより生じたネガティブな感情を自覚し、その経験を通して自分の信念と現状の乖離を調整しているということが推測された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 4 件)

- ① 澤田匡人・江上園子・平井美佳・大久保智生・遠藤利彦 「対人関係におけるネガティブ感情の適応的意義」 日本心理学会第 74 回大会 ワークショップ 2010 年 9 月 21 日 大阪大学 (大阪)
- ② 江上園子・朴信永・石野陽子・遠藤利彦 「母親の特性と子どもへのかかわり方との関連を考える」 日本発達心理学会 21 第回大会 ラウンドテーブル 2010 年 3 月 28 日 神戸国際会議場 (神戸)
- ③ 江上園子 「乳幼児を持つ夫婦の「母性愛」信奉傾向と夫婦関係満足度が母親の養育態度に与える影響」 日本心理学会第 73 回大会 ポスター発表 2009 年 8 月 27 日 立命館大学 (京都)
- ④ 江上園子・荒牧美佐子・安藤智子・岩藤裕美・松寄洋子・無藤隆・住田正樹 「育児研究が子育て支援に貢献できる道を探

る」 日本発達心理学会第 20 回大会 自  
主シンポジウム 2009 年 3 月 25 日 日  
本女子大学 (東京)

[図書] (計 1 件)

- ① 江上園子・荒牧美佐子・安藤智子・岩藤  
裕美・松寄洋子・無藤隆・住田正樹 ミ  
ネルヴァ書房 発達 120 号 「育児研究  
が子育て支援に貢献できる道を探る」  
2009 年 pp.2-3, 21-28.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

江上 園子 (EGAMI SONOKO)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：10451452